俳句大観

俳句大観

麻生磯次
阿部喜三男
阿部正美
鈴木勝忠
宮本三郎
森川昭
編

明治書院

俳句大観

定価 四、八〇〇

著者紹介

麻生 磯次　学習院院長をへて、学士院会員。

阿部喜三男　明治大学政経学部教授。死去。

阿部 正美　国士館大学文学部講師。

鈴木 勝忠　岐阜大学教育学部助教授。

宮本 三郎　学習院大学文学部教授。

森川 昭　成蹊大学文学部助教授。

昭和四十六年十月十日 印刷
昭和四十六年十月十五日 発行

著者　麻生磯次

発行者　株式会社 明治書院
代表者 三樹 彰

印刷者　大沢印刷株式会社
代表者 大沢 忠義

発行所　株式会社 明治書院
東京都千代田区神田錦町一丁目十六番地
郵便番号 一〇一
電話東京二九四―五三三六（代）
振替口座 東京四九九一

© 麻生磯次 1971
1592-10124-8365 製本・誠光社印刷製本株式会社

はしがき

俳句は第二芸術であるなどと軽く扱われたことがあったが、そのために俳句は衰えるどころか、かえって年とともに盛んになり、現在俳句人口はおびただしい数にのぼっている。小詩型で、はいりやすいということもあって、おそらく日本人なら誰でも一句か二句作った経験があるであろう。それくらいに国民一般に親しまれ、愛せられているのである。

俳句は日本の風土気候と密接な関係をもっている。日本の自然には湿いがある。樹木や水田や河沼が多く、春や秋は霞や霧に蔽われ、色彩はたいへん軟かである。こういう風土気候が慎しみ深く象徴的な文学にとって有利な条件であることはいうまでもない。俳句は日本の風土の産んだもっとも自然な文学であって、今では体臭のように私どもの肌身にまつわりついており、それを払拭しようとしても、そう簡単にはいかないのである。しかしこれは決して悲しむべきことではない。

日本に長く住み日本文学をこの上もなく愛したブライス博士は、日本人が本当に俳句や川柳を愛し続けていたら、この前のような悲惨な戦争は引き起こさなかったであろうと、慨嘆したことがあった。現在日本には俳句の愛好者は少なくないが、しかし、本当に平和を愛する心があるなら、その愛好者はもっとふえてもよいはずである。

俳句を愛好するというのは、ただ句を作ることだけではなく、古今の俳句をしみじみと理解し味わうことである。わかりやすいようでなかなかその真意のつかめないのが俳句である。人口に膾炙しているものでも、さて考えてみると句意の明瞭でないものが少なくない。その意味を簡明適切に説明した辞典が座右にあったらどんなに救われるであろう。そういう目的のために編纂された大規模な著述が当然あってもよさそうである。

本書はそういう要望に応えるために企画されたものである。広く人々に知られた句はいうまでもなく、価値の認められる句はほとんど網羅し、その出典をあげ、季語を示し、一句につき四百字程度の適切な解釈と鑑賞を加えたものである。有名な句については従来かなり詳しい研究があるが、これほど多数の句を一書に集めて解釈した書は恐らく類例がないであろう。

近世初頭から現代に至る俳句はおびただしい数にのぼっている。同じ俳句でも時代により人によって変化があり、貞門と談林と蕉風とでは俳風を異にし、貞徳・宗因・芭蕉・蕪村・一茶・子規とそれぞれ特色をもっている。本書は俳風の変遷がわかるように、時代を

追って俳句を列挙し、個々の俳人の理解に資するために、個人別に作品を集めている。本書に親しむことによって時代の流れを察知し、個々の特色を具体的に把握することになるであろう。俳句愛好の機運は本書の出版によって著しく高められるに違いない。

俳句の理解は語句の解説だけではなく、俳味を会得することでなければならない。俳句は日常茶飯の生活に題材を求め、味噌汁の匂いや酢の味や着物の肌ざわりというような身辺些事の感覚を表現する。外界の気温や空気に対しても敏感であって、四季の変移を微妙にとらえる本能的な叡智をもっている。実際、俳句ほど感覚的気象的な文学は稀である。

俳諧が日常卑近の感覚的材料を求めるということは、それが卑俗な文学であるということにはならない。俳句は十七字という極端に緊縮された詩型によって、思想なり情趣なりを表現しなければならない。もとよりくだくだしい説明やこまやかな叙述は許されない。感覚的な風物を印象的に投げ出して、その中に含まれるものを悟らせようとする。俳句には燃えさかる情熱や深刻な思想は見られないが、その代わりに物静かな落ちつきと澄明な美しさがある。俳句の理解にとって重要なことは、静寂美のもたらす風韻を感得することである。俳句は短詩型であるから高級な芸術にはなり得ないというのは、質と量とを混同した考え方である。明眼の僧は千言万語を費やす代わりに、一語を述べ一喝を下すにとどめるであろう。大地も詮じ詰めれば粟一粒に過ぎず、一毫頭上に乾坤を宿すこともできるのである。庭前に白く咲いた花を見ても、蛙の飛び込む音を聞いても、万法の真理を悟ることはできるにちがいない。

「いひおほせて何かある」という芭蕉のことばが伝わっているが、俳句は叙述を極端に節約し、不用なものはすべて省略している。したがって、投げ出されたものは自然や人事の断片にすぎないが、断片は断片としてあるのではなく、全体との関連をもち、作者の心の篩にかけられている。

作者の心を訊ね、作品の真実に触れることが、俳句の理解にとっては重要である。そこで本書では、古註などを唯一の手がかりにした型にはまった解釈をするのではなく、句の内部に立ち入り、詩情を明らかにしようとした。限られた紙幅であるから、説明は十分とはいえないが、本書の意のあるところを汲んでいただければ、筆者にとっては望外の幸いである。

昭和四十六年八月

麻生磯次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡例

一、本書は、創始期より現代に至る俳句二八四三句（挿入句を加えて約四千）を集録し、季語・出典・年代・語釈・評解の順序に従って、一句につき四百字程度の説明を加えたものである。

一、句の選択に当たっては、教科書等に採用された有名な句はいうまでもなく、俳句として価値ありと認められるものは、できるだけ広く採録することにした。

一、句の配列は、俳句の歴史の進展に応じて、創始期・貞門期・談林期・芭蕉・蕉風・享保期・蕪村・中興期・一茶・化政天保期・近代の十一項目にわけ、それぞれの時期の俳風を明らかにしようとした。

一、一つの項目内の作者の配列順序については、年齢順、句の多寡、知名度、活躍状況、作風等を考慮して、各執筆者がこれをきめた。

一、同じ作者の句の配列は、年次不詳のものが少なくないので、創作順序にはよらず、現代かなづかいに基づいて五十音発音順に配列した。

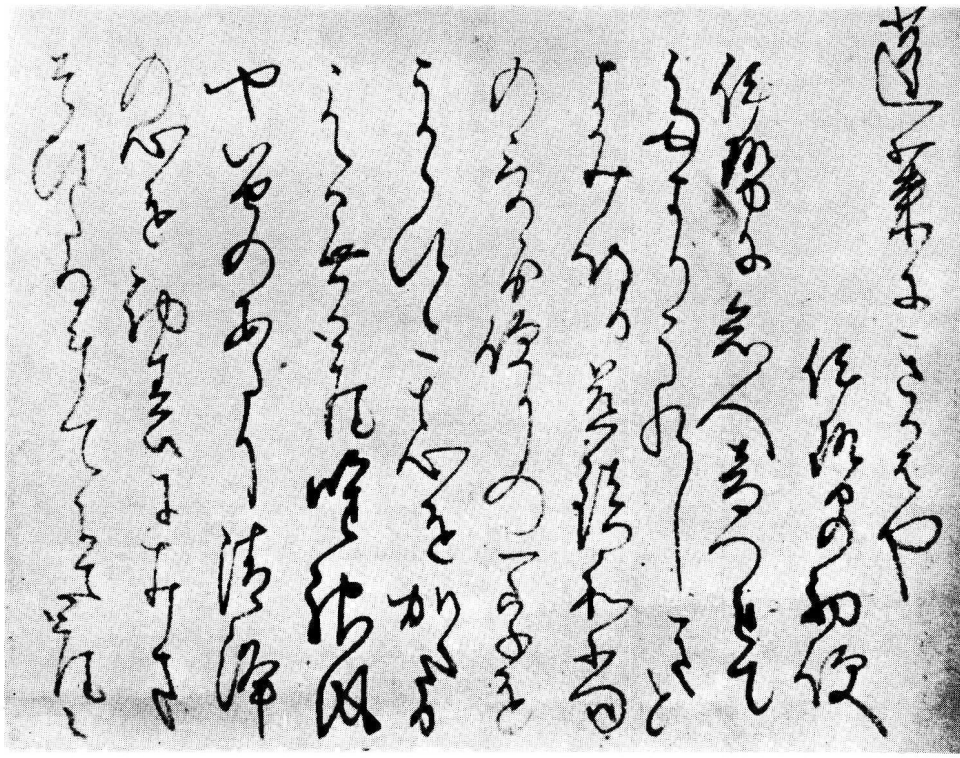
一、俳句は、原型を尊重したが、適宜現行の漢字をあて、送りがなを施すなど読み易いようにし、歴史的かなづかいで統一した。語釈・評解等は現代かなづかいとした。出典は代表的なものを掲げるにとどめ、その書目については簡単な解題を加え、また作者の略伝も添えた。別に相互の連関を明らかにするために、俳諧史概説を付載した。

一、検索の便をはかるため、俳句には通し番号をつけ、「評解」中の引用句をも合わせて巻末に付した。

一、本書は、明治書院創立七十五周年記念出版の一つとして計画されたものであって、

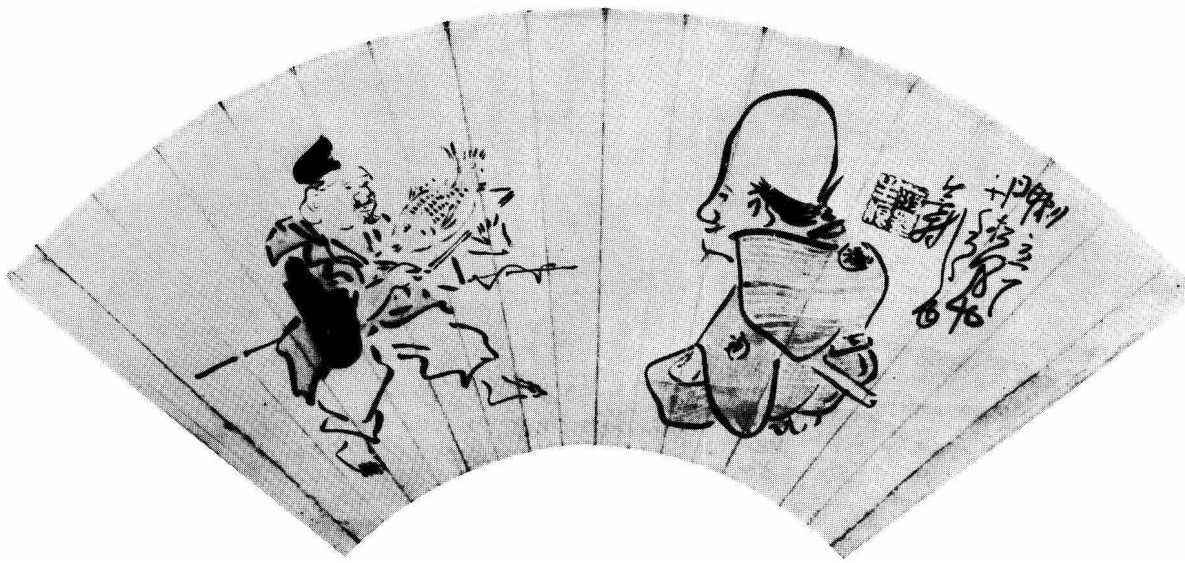
森川　昭……創始期・貞門期・談林期
阿部　正美……芭蕉・蕉風
鈴木　勝忠……享保期・中興期・俳諧史
麻生　磯次……蕪村

宮本　三郎……一茶・化政天保期
阿部喜三男……近代
の六名が分担して執筆した。



蓬莱にきかはや
　　伊勢の初便
伊勢に知人音つれて
たよりうれしきと
よみ侍る慈鎮和尚
の哥ゟ便りの一字を
うかかひゟ其心を加へたる
にてハ無御座唯神風
やいせのあたり清浄
の心を初春に打さ
そひたるまてにて御座ゟ

元禄七年正月廿九日付菅沼曲翠宛芭蕉書簡の一節である。歳旦の句の成立事情を説明している点に興味があるし、最晩年の暢達枯淡な書風をうかがうこともできる。



剃立て
門松風や
ふくろく
しゅ

蕪村

潑墨生痕

西鶴の「好色五人女」巻五に「弁才天の前巾着・福禄寿の剃刀」とあり、「狂歌画本大津みやげ」には、梯子をかけて福禄寿の頭を剃っている図がある。

目次

はしがき……一
凡例……三

創始期
宗祇……一
兼載……一
宗長……一
宗鑑……一
守武……三
元理……五
由己……五
秀吉……六
幽斎……六
紹巴……七

貞門期
貞徳……七
光広……一〇
望一……一一
徳元……一二
為春……一四
立圃……一四
重頼……一六
令徳……一九
西武……一九
貞室……二〇
季吟……二二
梅盛……二四
玄札……二五
未得……二六
卜養……二七
蝶々子……二八
山人……二八
二葉子……二八
風虎……二九

談林期
宗因……三〇
西鶴……三四
松意……三七
高政……三七
三千風……三八
団水……三九
似春……四〇
信徳……四一
常矩……四一
惟中……四二
調和……四三
捨女……四四
秋風……四四
来山……四五
言水……四七
才麿……四九
鬼貫……五一

芭蕉
芭蕉……五四

蕉風

素堂……一四一　其角……一四三　嵐雪……一五二　杉風……一五六
曽良……一五八　野坡……一六〇　桃隣……一六二　沾徳……一六三
不角……一六四　荷兮……一六四　越人……一六五　露川……一六七
去来……一六七　凡兆……一七四　丈草……一七六　路通……一八二
惟然……一八四　智月……一八六　許六……一八七　土芳……一八九
北枝……一九一　浪化……一九三　園女……一九四　支考……一九五
涼菟……一九七

享保期

琴風……一九八　百里……一九九　秋色……二〇〇　祇空……二〇一
珪琳……二〇二　宗瑞……二〇二　柳居……二〇三　馬光……二〇四
祇徳……二〇四　寥和……二〇五　紀逸……二〇五　心祇……二〇六
祇明……二〇七　為邦……二〇七　巴人……二〇八　吏登……二〇九
几圭……二一〇　乙由……二一一　廬元坊……二一二　希因……二一三
巴静……二一四　巴雀……二一五　貞佐……二一六　超波……二一七
一漁……二一八　湖十……二一八　湖十世……二一九　沾洲……二二〇
常仙……二二一　尾谷……二二一　羊素……二二二　乾什……二二三
沾涼……二二三　沾山……二二四　青峨……二二五　春来……二二六
淡々……二二六　羅人……二二八　白羽……二二八　紹簾……二二九

蕪村

蕪村……二三一　瓢水……二三〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中興期

宋屋……二九八　雁宕……二九九　蝶夢……三〇〇　嘯山……三〇一
冨天……三〇二　風律……三〇三　鳥酔……三〇三　柳几……三〇四
旨原……三〇五　存義……三〇六　蓼太……三〇七　秋瓜……三〇八
白雄……三〇九　素丸……三一〇　野逸……三一一　麦浪……三一二
涼袋……三一二　千代……三一三　五竹坊……三一四　諸九……三一五
也有……三一六　白尼……三一七　麦水……三一八　暁台……三一九
玄武坊……三二〇　太祇……三二一　召波……三二二　大魯……三二三
樗良……三二四　几董……三二五　闌更……三二六　青蘿……三二七
二柳……三二八　無腸……三二九　月渓……三三〇

一茶

一茶……三三〇

化政天保期

大江丸……三五七　成美……三五九　士朗……三六一　道彦……三六二
巣兆……三六三　月居……三六四　紫暁……三六五　五明……三六五
乙二……三六六　長翠……三六七　素郷……三六七　不白……三六七
素外……三六八　抱一……三六八　星布尼……三六九　荘丹……三六九
素檗……三六九　葛三……三六九　樗堂……三七〇　菊舎尼……三七〇
蒼虬……三七〇　鳳朗……三七一　梅室……三七二　多代女……三七三

近代

正岡子規……三七三　内藤鳴雪……三八二　尾崎紅葉……三八四
角田竹冷……三八四　夏目漱石……三八五　松根東洋城……三八七
松瀬青々……三八七　村上鬼城……三八八　石井露月……三九二

河東碧梧桐……三九三
荻原井泉水……四〇三
吉岡禅寺洞……四〇七
久保田万太郎……四一一
原石鼎……四二三
富安風生……四三四
阿波野青畝……四四五
臼田亜浪……四五四
川端茅舎……四五七
杉田久女……四六六
星野立子……四六八
栗林一石路……四七一
富沢赤黄男……四七五
平畑静塔……四七九
加藤楸邨……四八七
大野林火……四九八
中塚一碧楼……三九九
種田山頭火……四〇六
芥川龍之介……四〇九
高浜虚子……四一三
飯田蛇笏……四二六
水原秋桜子……四三七
山口誓子……四四六
富田木歩……四五六
松本たかし……四六二
長谷川かな女……四六七
中村汀女……四六九
芝不器男……四七二
西東三鬼……四七六
石橋辰之助……四八〇
石田波郷……四九二
中島斌雄……四九九
大須賀乙字……四〇二
尾崎放哉……四〇六
室生犀星……四一〇
渡辺水巴……四二〇
前田普羅……四三〇
高野素十……四四二
山口青邨……四五二
西島麦南……四五七
長谷川素逝……四六五
竹下しづの女……四六八
橋本多佳子……四七〇
日野草城……四七三
秋元不死男……四七七
中村草田男……四八〇
金子兜太……四九八
安住敦……五〇〇

付録

俳人略伝……五〇一
俳書解題……五二三
俳諧史……五四九
俳句索引……六〇三

宗祇

○○ 鳴けや鹿鳴かずば皮をはぎの坊　宗祇

季語鹿―秋出典犬筑波集評解「八幡にて」と前書がある。男山の石清水八幡宮には萩の坊というのがある。その萩と皮を剝ぎとを言いかけた句である。石清水八幡宮には鹿にふさわしい萩を名に持つ萩の坊があるのだから鹿よ鳴きなさい、鳴かなければ皮を剝いでしまうぞ、というのである。この句については、令徳の『嵐山集』には次の逸話をのせている。「なけや鹿なかずば皮をはぎの花　長頭丸／この句を式部卿聞きて、これは昔萩の坊にて宗祇の作なりと申されしと、丸に人の語られける時、丸／八幡ぞいざしら萩の花の作／と答へ申せしかば、よき誓言と笑ひ侍りし」長頭丸とは松永貞徳、式部卿とは石清水八幡宮瀧本坊の松花堂昭乗である。

○○ 花にほふ梅は無双の梢かな　宗祇

季語梅―春出典畳字百韻連歌評解宗祇独吟の「畳字百韻連歌」の発句である。「畳字連歌」とは、各句に漢語を詠みこんだ連歌のことで、漢語には連歌用語であるやまとことばとはちがった調子があるから、俳諧味をかもしだすのである。この句の場合でいえば、「無双」がそれである。句意は、花盛りの梅の花はくらべるものがないほどみごとである、というので、内容的には卑俗なおかしみはない。貞室の『玉海集』には「ある人の所望にて、畳字の誹(俳)諧独吟に百句せし時」と前書して出し、また寛文四年の『蠅打』には、宗祇の同宿窓梅という人の筆にかかるこの百韻が、京都六角堂頂法寺の勝仙院に伝えられている由を述べている。作られた時代の古い事もあって、貞門時代には有名であったらしい。今では霊元天皇宸筆にかかる一巻全部が発見紹介されている（伊地知鉄男「和歌・連歌・俳諧」『書陵部紀要』第三号）。

兼載

○○ 花よりも実こそほしけれ桜鯛　兼載

季語桜鯛―春出典犬子集評解「桜鯛」は桜花の咲くころ産卵のために内湾の浅い所に群集して捕獲される鯛。そのころは体色もあざやかになり、肉もつき脂ものってうまい。俳諧ではもっぱら、植物の桜に言いかけて詠まれる。たとえば、「釣舟に生けてみよかし桜鯛　親重」（『犬子集』）「鯉は瀧木に咲きのぼれ桜鯛　重勝」（『犬子集』）。さて掲出の一句は「花より団子」「名を捨てて実をとる」の成語をふまえ、それに「身」を言いかけたもので、桜咲くこのころとれる鯛は桜鯛の異名があるが、そのような美しい名前よりも、うまい身の方がほしいものだ、の意。この句は早く『犬子集』に無名でとられ、その後『新独吟集』には巻頭に据えられて有名なものだが、現在では霊元天皇の宸筆本も発見紹介されている（伊地知鉄男「和歌・連歌・俳諧」『書陵部紀要』第三号）。

宗長

○○ 猿の尻木枯知らぬ紅葉かな　宗長

季語紅葉―秋出典犬筑波集評解そろそろ木枯しの吹くころになったが、猿の尻は木枯しなどは知らぬ顔に、秋の紅葉のごとく真赤である、というのである。真如蔵旧蔵本『犬筑波集』には「坂本より発句所望の由申しければ」と前書がある。坂本は比叡山の東麓に当たり、猿は延暦寺のお使であるから縁が深い。そこで猿を詠みこんだ。句のあとに「おさあひなどの候ふ座敷にましまさば、猿の顔と申すべしや」と注記してある。「おさあひ」すなわち少年は男色の対象とされ尻に関係があるから、遠慮して顔とした方がよいというのだが、これはむしろ卑俗な笑いを狙った注であろう。『犬筑波集』には作者名を記さないが、『醒睡笑』では宗長が大徳寺居住時代、延暦寺の友人からの所望で詠んだとし、帰りかける使の者を呼び戻して「向こうの寺にはお児さんがいるか」と尋ね「居ります」の返事を聞いて「猿の尻」を「猿の面」に直したという話になっている。しかし、この句を書いた宗鑑自筆の短冊があるから宗鑑作とすべきだという最近の研究もある（明治書院『俳句講座』俳人評伝篇上、木村三四吾）。後のものだが三浦為春の『犬俤』に「木葉猿の尻はまことの紅葉かな」の類句がある。

宗鑑

○○ うづき来てねぶとに鳴くや時鳥　宗鑑

季語時鳥―夏出典真蹟評解四月になって、時鳥が力強く太い声で鳴いていることだ、の意。「うづき」に陰暦四

月の異称卯月と、腫物の痛む意味の「疼き」を言いかけ、「ねぶと」に時鳥の鳴き声の「音太」と腫物の一種の「癤」を言いかけた句作りである。本来詩歌の世界で風流優雅なものとして珍重されて来た時鳥に、腫物のような卑俗なものをとりあわせたおかしみが、この一句の眼目である。伝統的な観念を裏返しにして人々の意表をつくところに俳諧の面白さの一面があったのであるが、そういう意味では、彼の狂歌という「かしがましこの里過ぎよ時鳥都のうつけいかに待つらん」(『天水抄』上)とも通じるものがある。なお、『犬筑波集』や季吟の『山の井』には作者名がなく、また貞室の『五条百句』には「卯月来てねぶとに鳴けや時鳥　明智日向守」として出してあり作者が別人になっている。

〇〇八　風寒し破れ障子の神無月　宗鑑

季語神無月―冬出典柿衛文庫蔵真蹟評解神無月は陰暦十月の異称、それに「紙無し」を言いかけてある。句は、紙すらほとんど残っていない破れ障子から吹きこむ初冬の風は、貧乏な我が身にひとしお寒く感じられることだ、の意。柿衛文庫蔵真蹟自画讃懐紙は、句を大きく散らして書き、左端に小さく粗末な藁屋を描き、その中には粗衲僧衣の人物が手をこまねいて座り、その前には草履がそろえて置いてある。障子は画面に見えないが、句画相補いたがいに照合して画讃としての効果をあげているのである。この句は「神無」が掛詞になっているが、それもごく控えめで、これによって滑稽感を出そうとしているのでなく、むしろ寒風に吹きさらされる陋屋に住む生活の実感の方が主体になっている。最近の研究では、宗鑑は必ずしも貧乏であったとばかりはいえないのだが、後出の「年暮れて」の句で述べるような事情で、宗鑑貧窮説話が形成されて行くのであろう。

〇〇九　元朝の見る物にせん富士の山　宗鑑

季語元朝―春出典俳諧古選評解元日の朝は、何かあらたまったすがすがしい気分がある、そういうときのながめとしては、富士山がもっともふさわしい、の意。元朝という漢語が連歌にはない感じを与えているだけで、内容的には俳諧らしいおかしみはない。むしろ年頭の句らしい品のある佳句である。この句は古い俳書に見えず宗鑑作とすべき確証がない。『俳諧温故集』(延享五年)に上五「元日の」の句形で出るのが古く、『類題発句集』には「元朝や」、『俳諧百一集』『俳諧名所小鏡』には「元朝の」の句形で出る。ところで、夢に見るものの中で縁起のよいものをいう諺「一富士二鷹三茄子」は、その出典をどこまでさかのぼり得るか知らないが、少なくとも本句初出の頃には一般化していたようだ。すると、この句がもてはやされた一因には、富士山をめでたきものとする意識があったのかもしれない。

〇〇八　月に柄をさしたらばよき団扇かな　宗鑑

季語団扇―夏出典犬筑波集評解『犬筑波集』には作者名を記さないが、徳元の『誹諧初学抄』以下宗鑑作としている。暑い夏の夕べ、空には涼しげな満月がかかっている、あの月に柄をさしたなら、よい団扇になることだろう、の意。月を扇や団扇にたとえることは、古来詩歌に例が多い。『夫木集』に見える「夏の夜の光すずしくすむ月を我が物顔に団扇とぞ見る」などは、この句とよく似た発想である。ただ、この句には、子供の口つきをそのままうつしたような無邪気さがある。

〇〇九　手をついて歌申しあぐる蛙かな　宗鑑

季語蛙―春出典阿羅野評解ちょこんとすわった蛙が、しきりに鳴いているようすは、まるで貴人の前で手をついてかしこまって歌を申しあげているようである、の意。『古今集』の序文に「花になく鶯、水にすむかはづの声をきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」と書かれて以来、蛙は歌を詠むものとされて来た。それに、あの小さなからだで神社のこまいぬのように手をついて構えた姿を結びつけて、かしこまって歌を詠みあげるとした。同じような蛙の姿を詠んだ句に、一茶の「悠然として山を見る蛙かな」があるが、どちらも古典をふまえユーモラスに詠んでいる。なお、寛文頃の貞門の俳書『耳無草』には道寸という人の作としてあり、宗鑑作とするには疑問があるという。宗鑑作とするのは、『阿羅野』が初出で、以後諸書にとられ、宗鑑の代表作の一つとされている。

〇一〇　年暮れて人物くれぬ今宵かな　宗鑑

季語年の暮―冬出典寒川入道筆記評解いよいよ年もおしつまった大晦日の夜となったが、この貧乏している自分に、誰も物をくれる人もない、の意。「年くれて」と「物くれぬ」の同音のくり返し、それに肯定と否定の対比のおかしみをねらった句である。『寒川入道筆記』によれば、年末困窮して正月も迎えられそうにない宗鑑がこの句を詠んだところ、人々が感心して数々の正月用品を持ってきてくれたという。宗鑑は実際にはさほど困窮してはいなかったようであるが、山崎の庵のそばの竹を切って油筒を作り、これを売って糊口をしのいだというような伝説も伝わっている。この「年くれて」の句や別項の「風寒し」の句が人口に膾炙し、また俳諧の祖として喧伝されるうちに、風狂の士としてのイメージが拡大し固定されてくるのであろう。

一〇一　にがにがしいつまであらしふきのたう　宗鑑

季語蕗の薹—春出典真蹟評解食べるとほろにがい蕗の薹が芽を出すころとなり、春特有の、強風が吹きまくって、折柄盛りの桜の花を吹き散らしてしまう、いったいいつまで吹きつづけるのか、にがにがしいことだ、の意。「にがにがし」に蕗の薹のほろにがい味と「困ったことだ」と嘆息する意を言いかけ、「ふき」に風が吹くと蕗とを言いかけた句作りである。春の風が吹いてにがにがしいといえば桜の花を惜しむ気持ちであり、それを表に出さずいったところにこの句のはたらきがある。この句は『犬筑波集』には無記名ではいっている。

一〇二　筆ひぢてむすびし文字の吉書かな　宗鑑

季語吉書—春出典小町躍評解「筆ひぢて」は「筆が濡れて」の意。「吉書」とは、古くは年頭にめでたい文句を書いて奏する文句をいうが、ここでは書初の意。句はもちろん『古今集』にある貫之の有名な「袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つ今日の風やとくらん」をふまえて詠んだものである。あの寒い冬の間濡れ凍っていた筆の先も、春立つ今日はとけてやわらかくなった、それで快く書初をすることだ、の意。筆・むすぶ（筆を作ることを「筆を結ふ」という）・文字・吉書は縁語である。また、中国で文字がなかった古い時代に、縄を結んで文字に代えたという故事をふまえているかも知れない。

一〇三　満丸に出ててもながき春日かな　宗鑑

季語春日—春出典誹諧初学抄評解このおだやかな春の日、太陽はまんまるにかがやいているが、春の一日は、のどかにながいことである、の意。満丸に出るのはSunであり、ながいのはDayであるが、日本語では両方とも「日」となる。その同音を利用しながら、丸いと長いのことばの上の対比のおかしみをねらった句である。この句は西鶴が諸家の短冊を刻模編集した『古今誹諧師手鑑』にも収められている。一方早く『犬筑波集』『犬子集』『俳諧発句帳』には中七「出づれどながき」の形で載るが作者名はなく、『百人一句』『俳諧温故集』はそれと同形で宗鑑作として出している。

守武

一〇四　青柳の眉かく岸の額かな　守武

季語青柳—春出典守武千句年代天文五年評解「岸の額」は岸のつき出たところ。句は、岸のつき出たところに青柳が生えている、それはちょうど、美人の額にかかれた眉毛のようである、の意。青柳の生えた岸のひたいを、黛美しい美人の額に見立てた句であるが、柳と岸・額の縁語で仕立てた機知が当時の人たちにとってはおもしろかったのである。柳は古来美人の眉にたとえられ、柳眉といえば美人の眉のことである。この句は『守武千句』第二の百韻の発句で、脇句は「氷うちとけよするたしなみ」と付けてある。新柳の岸辺には氷とけ水ぬるむ春のさざ波がうち寄せているの意で、「たしなみ」に女の嗜みを言いかけて発句の化粧に応じたものである。なお、徳元の『誹諧初学抄』には「風けづる柳や岸の額髪守武」の句が出ているが、同巧異曲の句である。あるいは、この句の一異伝であろうか。そのほか、『歴代滑稽伝』や『誹諧家譜』にも「青柳の」の句形でとられている。

一〇五　鶯の娘か鳴かぬ時鳥　守武

季語時鳥—夏出典守武千句年代天文五年評解『守武千句』第四の百韻の発句。時鳥は自分では巣を作らず、頬白・鶯などの巣に産卵して、巣の主に孵化養育させるというかわった習性がある。句は、人々がこれほど心待ちに待っているのにさっぱり鳴かない時鳥は、きっと夏には鳴かない鶯のそれも内気な娘として育ったためか、というのである。時鳥を待ちわびる気持ちを、時鳥の奇習にひっかけて巧みに詠んだ句である。なお、この発句に対する脇句は「梅卯の花に育ち来にけり」とある。発句の鶯に梅、時鳥には卯の花がつき、鶯の巣の中に生まれた時鳥は、春は梅の花、夏ともなれば卯の花の中で育ったので、娘らしくやさしく育って、鋭い声で鳴いたりはしないと付けた句である。

一〇六　元日や神代の事も思はるる　守武

季語元日—春出典真蹟年代天文五年評解「天文五年春、奉公のひまに詠みける」と前書がある。守武六十四歳の歳旦吟である。句は、神々しい元旦には、ひとりでに神代の昔が思われることである、の意。何の技巧もない素直な句で、わずかに「元日」という漢語がいわゆる俳言となって、誹諧味をかもし出しているだけである。『徒然草』十九段に「かくて明け行く空の気色、昨日に変りたりとは見えねど、ひきかへ珍しき心地ぞする」と書かれた、誰でも経験のある元旦の改まった気分を、いかにも神官らしく「神代の事も思はるる」と詠んだところが人気を博し、『発句題苑集』以下諸書にとられ、また上五「元朝や」の形で『俳諧温故集』以下にもとられている。しかし、この句は古い書に見えず、また真蹟に対して疑問を呈するむきもあり、守武作として百パーセント確実

であるとはいいきれない。

一八八　氷らねど水ひきとづる懐紙かな　守武

季語氷―冬　出典守武千句　年代天文五年　評解『守武千句』中の第九の発句。「懐紙」は連歌や連句を書きつける用紙で、二つ折りにして何枚か重ねて右の端を水引でたすきがけに綴じるのが例である。「水引」は進物用の包みに用いる糸ひもでもある。その「水引綴づる」に、水が氷る意味の「水ひき閉づる」（この場合「ひき」は接頭語）を言いかけた。句は、「水ひきとづる」というと水が氷るようだが、別に水が氷るわけではなく、懐紙を水引で綴じることだ、の意。掛詞を用い、「氷らぬ」と「ひきとづる」の肯定・否定を対比させるなど、複雑な技巧の句であるが、それを無理なくなだらかに言いこなしている。なお、脇句は「錐より細き冬の日のかげ」と付けてある。発句の水引を通す穴をあけるのに用いる錐を出し、懐紙を綴じている手もとにさしこむ冬の日ざしはその錐よりも細く弱々しいと付けたものである。

一八九　せこの者来べき宵なり泊り狩　守武

季語泊り狩―春　出典懐子　評解衣通姫が允恭天皇のたずねて来られるのを恋い慕って詠んだという、「わが兄子が来べき宵なりささがにのくものふるまひかねてしるしも」（『古今集』墨滅歌。この伝説は『日本書紀』にもみえ歌形に少異がある）のもじりである。「せこ」は「勢子」で狩場で鳥獣をかり立てる者、それに右の古歌の「兄子」を言いかけた。「泊り狩」は山野に泊り、宵に雉子の鳴く所を聞きおき、未明に鷹を使ってとる猟、泊り山ともいう。句は、さあ今夜から明朝にかけて泊り狩をすることになった、勢子の者たちもそろそろ集合する宵の口になったことだ、の意。古歌を無理なくもじり、思いがけない方向に転じた。この句は『俳諧温故集』『俳諧根源集』『俳人百家撰』にもとられ、守武の代表句の一つである。

一九〇　散る花を南無阿弥陀仏とゆふべかな　守武

季語花―春　出典真蹟　評解「菩提山にて」と前書がある。菩提山は伊勢の朝熊山にある菩提山神宮寺のことで、後に芭蕉も『笈の小文』の旅で「この山の悲しさ告げよ野老掘」と詠んでいる。春の夕べ、はらはらと散る桜の花を見ると、人生の無常も感じられて、神官である私までもつい「南無阿弥陀仏」と唱えてしまうことだ、の意。「夕べ」に「言ふ」を言いかけた句であるが、また、神官である守武が、お寺の雰囲気につられて、つい念仏を唱えてしまうというおかしみもある。この句は大変有名だったらしく、『伊勢俳諧大発句帳』以下各書にとられている。荷兮の『阿羅野』には「末期に」と前書がある。つまり辞世の句だというのだが、其角の『雑談集』には、神職の辞世としてはふさわしくない、ただ落花を嘆美した句だ、と言っている。句形でも『俳諧古選』などは、上五を「散る花に」としている。なお、守武の辞世の句に関連してついでに言えば、浦井有国の『俳諧天尓波抄』には守武の辞世として「朝顔に今日は見ゆらむ我世かな」をあげている。

一九一　飛梅やかろがろしくも神の春　守武

季語飛梅・神の春―春　出典守武千句　年代天文五年　評解「飛梅」は菅原道真が日頃梅を愛し、太宰府に左遷されるとき「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ」と別れを惜しんだ話は有名だが、のちにその梅が一夜にして太宰府にまで飛んできたという。「神の春」は神社の新春。その「神」に「紙」をかけている。句は、この神宮の新春もはや二十五日となって、今日はあの道真公の命日である、そういえば、この美しく咲いている梅の花はあの飛梅で、紙のごとくかろがろと飛んで来たのであろう、の意。この句は守武千句巻頭の発句である。守武が千句を発願したのは天文五年正月二十五日であったが、その日はちょうど文学・学問の神と崇敬される菅原道真の命日に当たるので、それに縁のある飛梅を出し、神と紙を掛詞にして句作りしたものである。脇句は「われもわれもの烏鶯」と付けてある。

一九二　夏の夜は明くれどあかぬまぶたかな　守武

季語夏の夜―夏　出典誹諧初学抄　評解古歌にも「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらん」とある通り、夏の夜は短く明けやすい。しかも暑くて寝苦しい。ようやくうとうとしたと思うともう夜は明けてしまうが、寝不足のためまぶたの方はなかなかあかない、というのである。「夜が明ける」「まぶたがあかない」という肯定・否定のことばの対比によるおかしみをねらった句であるが、日常誰でも経験するような事柄を平易に表現して実感のある句である。

一九三　撫子や夏野の原の落し種　守武

季語撫子・夏野―夏　出典誹諧初学抄　評解「撫子」に可憐な少女のイメージを重ねあわせ、「夏野の原」に「腹」をかけて、「落し種」に「御落胤（高貴な人が賤しい身分の女に生ませた子ども）」を言いかけた句である。句は、雑草がぼうぼうと生い茂った夏の野原に可憐な撫子が咲いている、これは高貴な方の御落胤の少女とでもいうべきものだ、の意。掛詞の技巧をこらした句ではあるが、荒々しく雑草の生い茂る夏野の撫子に、可憐な少女のイメージを見いだしたのは実感でもあろう。この句は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com